

入試 1 本化初年度 結局どんな入試だったの？

ただ、公立高校が緩やかな入試であったかというところでもありませんでした。例年と同様に人気の 2 極化がみられ、普通科の学力的に上位の学校は例年同様に厳しい入試となりました。

普通科合格基準偏差値別入試状況

合格基準偏差値	令和 2 年度入試			令和 3 年度入試	
	前期 実質倍率	後期 実質倍率	後期 不合格者	実質 倍率	不合格者
65 以上	3.01	2.10	495	1.55	614
60~64	2.31	1.71	648	1.33	758
55~59	2.30	1.75	953	1.34	1,060
50~54	2.06	1.49	740	1.23	815
45~49	1.84	1.30	544	1.07	286
40~44	1.75	1.27	446	1.06	226
40 未満	1.41	1.13	346	1.02	133
合計	1.73	1.41	4,287	1.15	4,340

(1) 令和3年度公立高校入試の変更点

令和3年度より、千葉県の公立高校入試が大きく変わりました。詳しくは以下の通りです。

	令和 2 年度	令和 3 年度
入試日程	前期:2/12・13 後期:3/2	2/24・25
選抜枠	普通科前期に制限(募集定員の 60%まで)	制限なし(1 回で全定員を募集)
志願変更	後期のみ可	可
学力検査	前期:5 教科(各 50 分) 後期:5 教科(各 40 分)	5 教科(英語は 60 分、 その他各 50 分)
選抜方法	前期:各校独自の方法 後期:全校共通の方法	各校独自の方法 ※但し、配点等について共通のルールを設定
評定の取り扱い	算式 1 を使用	算式 1 は使わない

③内申(評定)～算式1の廃止～による影響は？

算式1 ⇒ 「 $X + \alpha - m$ 」

X = 個人の評定合計値(調査書の3年間の合計値。135 点満点)

α = 評定合計標準値(県が定める。当面は $\alpha = 95$ とする)

m = 各中学校の第 3 学年の評定の合計値の平均値

① 学力検査を2日間に分ける

これまでの前期・後期選抜では、1 日で学力検査 5 教科を実施していましたが、一本化後は 2 日間に分け、初日に国語・数学・英語の 3 教科、2 日目に理科・社会の 2 教科を行うようになりました。また、英語のみ 60 分での実施となりました。数年前からリスニングの比重が高くなり、「試験時間が足りない」という声が上がっているため、それに応える措置のようです。

2 日目の学力検査終了後には、各校独自の検査(学校設定検査)が実施されます。これまでの前期 2 日目と同様の検査を実施する学校が多いのですが、一部で変更するケースも見られました。また、一本化後は 2 日目にも学力検査を行うことになり、学校設定検査は午後からの実施となるため、これまで 2 つの検査を実施していたのを 1 つに減らす学校も目立ちました。

② 公立志望者減も人気校は依然高倍率。上位志向も変わらず

中 3 在籍者数に占める公立高校志望者の割合

年度	中 3 在籍数	公立高校全日制志望者数			割合
		普通科	専門学科	計	
H29	52,287	33,675	6,810	40,485	77.4%
H30	52,163	33,094	6,457	39,551	75.8%
H31	50,863	31,920	6,101	38,021	74.8%
R2	50,637	31,350	5,954	37,304	73.7%
R3	48,326	29,064	5,036	34,100	70.6%

令和 3 年 1 月の段階で公立中学 3 年在籍者数に占める公立高校第 1 志望者の割合は 70.6%でした。このところ、公立高校第 1 志望者の割合が低下傾向にありましたが、昨年はそれがさらに顕著になりました。入試 1 本化への不安に加え、コロナ禍という状況で休校中の公立高校と私立高校の対応の違いや、就学支援金制度の拡充等による授業料実質無償化なども私立単願者が増加した要因でしょう。

これまでは上記の算式を用いて各生徒の評定値が、在籍中学の中学校評定合計平均値が 95 より高ければその分だけ減点され、95 より低ければその分だけ加算されるといういわゆる調査書の補正が行われてきました。これにより、多くの中学が、学校平均値が 95 前後になるように調整していました。

令和 3 年度入試からは中学校ごとの評定合計平均値による補正を行わずに、そのままの数値で評価する形になりました。内申の高騰を抑えるために採用されてきた算式 1 ですが、それが使用されなくなることで内申の値が再び上昇することが予想されます。ちなみに 1 学区(千葉市)の令和 3 年度入試における中学校別の評定合計平均値は令和 2 年度に比べ上昇した学校が 54 校中 22 校、下降した学校が 18 校、変化がなかった学校が 14 校、平均すると約 0.2 ポイントの上昇と今のところ目立った内申の高騰は見られませんでした。近隣の中学校では花園中が 98(令和 2 年度は 97)、稲毛中が 92(令和 2 年度は 95)、朝日ヶ丘中が 96(令和 2 年度は 94)でした。

(2) 入試 1 本化。そのメリットは

受検機会が 2 回あることにもメリットはありました。その最大のメリットは、前期で挑戦校を受検することができるということです。1 回入試になれば、多くの生徒は“実力相応校”のみの受検とならざるを得なくなるでしょう。

一本化することによる最大のメリットは、1 回入試であれば合格していたはずの生徒が不当に不合格にならずに済むということです。

<前・後期選抜>ですと、前期では定員の 60%までしか採りませんから、下位 40%の受験生は不合格になってしまいます。例えば、令和 2 年度の市立千葉高校・普通科では、前期入試で 451 名が受験して 168 名が合格、283 名が不合格でした(倍率 2.82 倍)。後期では 112 名合格していますから、これが一本化されると、合格 280 名、不合格 171 名(倍率 1.61 倍)となるわけです。

不合格を経験する生徒が 112 名も減るということは、必要のない志願変更をして志望校を下げたり、併願の私立高校に決めてしまったりする生徒も減るということです。